

親鸞の女性観

源 淳子

親鸞が女性を如何に観たかという問題は広く人間を如何に観たかということと別問題ではない。何故ならば、親鸞の信心の問題に於いては、「親鸞一人がため」ということと同時に、「男女貴賤ことごとく」「男女老少をいはず」ということが、軌を一にして捉えられているからである。

ただし、仏教思想の流れの中では、女性について、様々な見方がなされてきたため、ある意味では、それを継承しているところもある。浄土教に於いても、『無量寿経』第三十五願「設我得仏、十方無量不可思議諸仏世界、其有女人、聞我名字、歡喜信樂、發菩提心、厭惡女身。壽終之後、復為女像者、不取正覺。」には、女性も成仏するが、条件つきの成仏でしかないと言っている。より明瞭なのは、『大阿弥陀経』第二願である。そこには、「使某作仏時、令我國中無有婦人、女人欲來生我國中者、即作男子。」とあつて、變成男子の思想がはつきりと説かれている。女性が成仏するときには、必ず一度男に生まれ変らねば成仏できないという差別思想の中に女性は位置しているのである。

親鸞は、この第三十五願を受け継いで、『浄土和讃』にあらわしている。そこには、「三十五願のころなり」と付注しているから、それを受けたことに間違いはない。しかし、「弥陀の大悲ふかければ

仏智の不思議をあらはして 變成男子の願をたて 女人成仏ちかひたり」とうたつたのは、三十五願でいわれる差別的な變成男子の思想をそっくりそのまま受けたことを意味するのではない。それはあくまでも三十五願文のころとして紹介したにすぎず、本願のころを本意として領解したものではない。それは、和讃に於ける付注からみても、他の十九願、二十願の付注と同形式であり、親鸞が本意とする十八願の付注とは違つてゐる。十八願をうたつた和讃には、「本願のころ、第十八の選択本願なり」と付注しているのに対して、他の二願についてうたつた和讃では、「十九の願のころ 諸行往生なり」「二十の願のころなり 自力の念仏を願じたまへり」としてゐる。親鸞が本意とする十八願については、「本願のころ」と出しているところからみて、三十五願に於いても、それを本意とするものではないとかがわれる。親鸞が、この三十五願の變成男子の思想を受け継いだことは、鎌倉期という時代を考へるならば、その歴史状況の限界として受け取るべきであると考ええる。

では、親鸞が本質的なものとして言わんとする女性観とはどういうものだろうか。鎌倉時代という封建的な社会の中で、社会的にはもちろん、仏教的にもみられる男女差別思想を、そのまま見詰め、その差別観を克服していつたところにこそ、親鸞に於ける女性観の本質があると思われる。親鸞が、「男女貴賤ことごとく、弥陀の名号称するに 行住座臥もえらばれず 時処諸縁もさはりなし」とうたい、「おほよそ大信海を按ずれば、貴賤縊素を簡ばず、男女老少を謂はず……云々」と告白したところにみられるものは、単に男女平等をうたつたものではなく、男女差別を差別としてみつめつつ、信心の論理にもとづいて、その差別を克服・超越していつたところに

出てくる思想である。これは、親鸞が、「弘願と言ふは、大経の説のごとし。一切善悪の凡夫生ずることを得るは、皆、阿弥陀仏の大願業力に乗じて、増上縁とせざるはなきなり。」⁹「弥陀智願の広海に凡夫善悪の心水も 帰入しぬればすなはちに 大悲心とぞ転ずなり」と示すとおり、その信心の論理に於いて、人間的条件である男女・貴賤・老少・善悪などを問題にせず、救済を語るところから出ているのである。親鸞が何故そういうた人間的条件によつて、救済に区別をつけなかつたかという問題を考えるならば、親鸞は自己の救いを求めて、浄土へ志向するわけであるが、浄土志向は、本願即ち真実にふれることにより、浄土志向とは逆の方向である自己内省へ転化せしめられるのである。それは、質的転換がおこることというのではなく、浄土志向と自己内省が同時に行なわれることを示すものである。親鸞が浄土志向に徹底すればするほど、本願によつて、浄土へそむいている自己に気づかされるのである。このことは、全く矛盾しているようであるが、信仰の論理として、矛盾することなく成立しているのである。人間が浄土志向する場合、本願の前では、様々の人間的条件は問題とはならず、無差別の救済が成り立つわけであるが、同時に、本願の前では、人間的条件が顕わになり、その姿により、人間の側からは、救われえないということになるのである。即ち、差別の中にしかない現実存在にかかわる自覚しか出てこないのである。そこでは、あくまでも救われえないという自己告白しか出てこないのである。「自身は現にこれ罪悪生死の凡夫、曠劫よりこのかた常に没し常に流転して、出離の縁あることなしと信ず。」¹⁰「煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界は、よろづのことみなもてそらごとたわごと、まことあることなきに」¹¹などと示される

のは、親鸞自身が罪深き煩惱をもつたものであると自覚したことにはかならない。故に、古来いわれていたように、女性のみが極悪人とはとうてい思えなかつたのであり、男・女という小さなわくの中に存在しつつも、そういうわくを超え、人間という立場に立つて、自己をみつめ、女性をみたのである。男・女という性を異にしなから、しかも、男も女もない、この世で生きんとするぎりぎりの自覚者としての立場である。特別に女性だから邪悪なものであるとか、一度男に生まれ変わらなければ成仏できないとかいう見方ではなく、そういうた差別のある状況の中で、その差別を超えたところに生まれた人間把握に於ける女性観こそ、まさに親鸞の女性観の本質といえるわけである。

注

- 1 『無量寿経』卷上「真宗聖教全書」(以下「真聖全」と略す)
- 一巻一一
- 2 『大阿弥陀経』卷上「真聖全」一巻一三六
- 3 『浄土和讃』「真聖全」二巻四九三
- 4 『高僧和讃』「真聖全」二巻五一二
- 5 『教行信証』信卷「真聖全」二巻六八(原漢文)
- 6 『教行信証』行卷「真聖全」二巻二一(原漢文)
- 7 『正像末和讃』「真聖全」二巻五二〇
- 8 『教行信証』信卷「真聖全」二巻五二(原漢文)
- 9 『歎異抄』「真聖全」二巻七九二